**令和２年度　霞ヶ浦学講座「常陸國風土記から見る霞ヶ浦」実施報告**
**実施日時：令和２年７月19日（日）10:00－12:00**
**場所：霞ケ浦環境科学センター多目的ホール**
**講師：千葉隆司氏（かすみがうら市歴史博物館館長）　　参加者数：30名**
**講演タイトル「常陸国風土記から見る霞ヶ浦」**
**概要**

かすみがうら市歴史博物館より千葉隆司館長をお招きし，常陸国風土記に記されています霞ヶ浦についてお話を伺いました。

風土記は奈良時代に編纂され，現在まで伝わっているのは「常陸国風土記」，「播磨国風土記」，「豊後国風土記」，「肥前国風土記」，「出雲国風土記」になり，東日本で伝わっているのは「常陸国風土記」のみとなり，古代東国を考えるうえで貴重な資料になります。

「常陸国風土記」から私たちは奈良時代の霞ヶ浦の様子を推し量ることができます。「海」「流海」の表記や浜や洲の存在（「乗浜」，「高浜」，「新治洲」）がみられます。霞ヶ浦は当時流海（うみ）と呼ばれていました。そして港が存在していることも「榎浦の津」，「津済」などから読み取ることができます。（津は「船着き場」「港」を意味します。）

当時の森林帯も，記載されている樹木の種類（椎，栗，槻（イチイ），櫟（クヌギ），榎（エノキ），椿など）から現在とあまり変わらないことが推測できます。
古代人は海苔を作ったり，塩を作ったりして暮らしをしていたことがわかります。
（*「信太郡能理波麻（乗浜）に浜・浦の上に多に海苔を乾かせり。」など*）
塩を作るための藻（アマモなど）や海の魚がたくさん生息していることも記されています。（*「凡て海にある雑の魚は載するに勝ふべからず。但，鯨は曽より見聞かず。」*）

鉄を取り，剣を作っていた記載もあります。（*「若松の浜は鍛佐備大麻呂らが鉄をとる場所で，その轍で剣を造る。」*）
また，現在でも残っている多くの地名が記載されています。（*信太郡高来里*（阿見町竹来），*行方郡麻生里*（行方市麻生），*行方郡板来村*（潮来市潮来）など）
そして奈良時代の役所と交通（古代官道，駅家）の様子も記されており，霞ヶ浦は地政学的にも重要な地域であったことがわかります。

古代の霞ヶ浦は遠浅な水辺の地形とそこに展開している生態系が大いに活用されており，農業に加え漁業文化と塩づくり産業，浜辺では製鉄産業も急速な発展をしていたと考えられます。そして流通や経済のために，人や物の移動のため津など水上交通の基盤が形成されていき，権力者の掌握によって地域が繁栄していったと推測できます。
一方で霞ヶ浦の親しみやすく風光明媚な自然環境から，多くの人が集うところへとなっていきます。
まさに常世の国であったといえます。
（文責　小川）